

## 1 事業名 中国ブロック 青少年体験活動フォーラム in さんべ

## 2 必要性

全国6ブロック（①北海道・東北，②関東周辺，③中部・北陸，④近畿・四国，⑤中国，⑥九州・沖縄）で、青少年の体験活動に関係する「青少年教育施設職員，教育行政関係者，青少年団体関係者，学校教員，自然学校といった民間教育団体関係者等」が一堂に会するフォーラムを開催し，本プロジェクトを実施した団体の実践事例を基にした研究協議や講演・講義等を実施することで，事業の成果を普及するとともに，団体間の情報の交換・交流を行い，ネットワークを広げる。

## 3 趣旨

青少年の体験活動の全国的な普及を図るため，その関係者が一堂に会し，青少年の体験活動を推進していくための実践的な研究協議や実践交流を図る機会を提供する。

## 4 共催・後援

共催 国立江田島青少年交流の家・国立吉備青少年自然の家・国立山口徳地青少年自然の家

後援 島根県教育委員会，鳥取県教育委員会，岡山県教育委員会，広島県教育委員会，山口県教育委員会，山陰中央新報社，島根日日新聞社

## 5 期日

平成22年12月4日（土）～12月5日（日） <1泊2日>

## 6 参加者

- (1) 募集対象・人数 青少年教育関係者，青少年教育施設職員，学校教育関係者，学校教育行政関係者，青少年団体関係者，民間事業者（自然学校等），青少年教育や青少年の体験活動に興味・関心のある方
- (2) 参加人数 96人
- (3) 参加者分析 募集定員100名に対し，一般から72名，青少年施設から31名，合計103名の応募があり，当日キャンセルを除くと参加者は96名であった。一般参加者の内訳は教職員19名，社会教育主事14名であり，青少年教育に携わる方の関心が高いことがうかがわれる。また，大学生の参加が17名と多く，「自分のスキルアップを目指したい」「普段参加しているボランティアとは違った活動に参加してみたい」等，自己啓発を考えての参加があり，幅広い年齢層のメンバー構成になった。
- (4) 参加者地域 島根県74名，広島県6名，山口県6名，岡山県5名，鳥取県4名，その他1名

## 7 講師等

○基調講演「人間力を育む体験活動の3H〔ヘッド・ハート・ハンド〕」

講師 國學院大學 人間開発学部長 新富 康央 氏



新富康央先生

○講話「青少年体験活動の動向について」

講師 東京学芸大学名誉教授 児島 邦宏 氏

○事例発表

「課題を抱える子どもに対する体験活動プログラムの事例」

発表者 国立江田島青少年交流の家 主任企画指導専門職 植田 佳宏 氏

「小学校長期自然体験活動プログラム開発」

発表者 国立吉備青少年自然の家 企画指導専門職 新田 治彦 氏

「幼少期の子どもの自信と自立につながる体験活動プログラムの事例」

発表者 国立山口徳地青少年自然の家 企画指導専門職 山本 和宏 氏

○分科会

第1分科会 事例研究「長期集団宿泊活動を推進するための方策」

事例発表者 島根県出雲市立今市小学校 教諭 竹下 透 氏

島根県立少年自然の家 社会教育主事 大石 学 氏

第2分科会 講話と実践活動「自然を楽しもう～自然体験学習の指導と技術」

講師 自然教育研究センター主任研究員 古瀬 浩史 氏

第3分科会 講話と実践活動「人間関係作りに役立つ体験活動とファシリテーション その意味と方法」

講師 玉川大学学術研究所心の教育実践センター主任代理 難波 克己 氏

第4分科会 講話と実践活動「学校の授業や学びに役立つ自然系博物館の活用」

講師 島根県立三瓶自然館研究員 星野 由美子 氏

## 8 参加経費

実費のみ（昼食 550 円，朝食 400 円，情報交換会 2,500 円，シーツ等洗濯料 200 円）



児島邦宏先生

## 9 事業の内容

### (1) 事業の特色

本事業は、文部科学省委託事業「青少年体験活動総合プラン（子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業）」のひとつであり、子ども・若者の直面する課題の解決をめざし体験活動を推進する事業である。

中国ブロックの国立4施設で実行委員会を組織し、各施設が共同して本事業を行うことで連絡協力の体制の構築をめざす。

### (2) 企画のポイント

実行委員会を開催し、昨年国立吉備青少年自然の家で行われた本事業の成果と課題をもとに、現在の青少年体験活動の動向を勘案して事業内容・講師を決定した。

事業の内容は、2日間を通して「体験活動の有用性を発信する」ことをねらいとした。そのため、座学形式で理論的に学ぶ場面と実際に体験して学ぶ場面を設定し、理論と実践の両面からねらいに迫ろうと考えた。

具体的には、1日目は「基調講演」や「体験活動に関する調査研究の発表」を通して体験学習の有用性について学ぶとともに、「青少年体験活動の動向」や「子ども・若者の直面する課題の解決を目指して行われた事業の事例発表」を通して体験活動推進に向けての方策を考えられるように

した。また、夜には情報交換会及び自由交流会の時間を設定し、講演や事例発表について全体会に引き続き講師や事例発表者と質疑応答や意見交換ができるようにするとともに、参加者同士の交流が深まるようにした。参加者の中には参加されていた講師に普段活動する中での悩みを相談する方もみられ、有効な意見交換の場となった。

2日目は、4つの分科会を設定し、三瓶の特色を活かした実践活動を取り入れた。第1分科会では「長期集団宿泊活動を推進するための方策」として、本施設を使って長期集団宿泊活動をしている小学校と、島根県内の青少年教育施設で行っている長期集団宿泊活動の事業を事例発表し、県内外から集まった参加者に県内の先進的なモデルとして発信するようにした。第2分科会では、自然体験学習に造詣の深い講師を招き、本施設周辺の自然を使った自然体験学習を実際に体験することで、三瓶の自然を使った自然体験学習の指導と技術を学べるようにした。第3分科会では、ファシリテーターとして全国的に有名な講師を招き、人間関係づくりのための体験活動を参加者が実際に体験できるようにした。この体験活動は本施設の活動プログラム（三瓶アドベンチャープログラム SAP）の基となるものであり、その理解を深めることにもつながるようにした。第4分科会では、隣接する島根県立三瓶自然館を会場に、専門的な施設を使いながら学校の授業や長期集団宿泊活動中の授業として利用できるプログラムを体験することで、自然系博物館の効果的な活用について考えられるようにした。

分科会の日程は、第1分科会を午前、第4分科会を午後を設定し、長期集団宿泊活動に関する内容のものがつながるようにした。また、参加希望の多かった第2・第3分科会は、午前と午後と同じ内容で2回実施し、参加者全員が第1・第2希望の分科会に参加できるように配慮した。なお、分科会は参加者がいろいろな体験活動と出会う場として捉え、多くの方に様々な体験活動に興味を持ってもらえるような内容で構成していただくように第2・3・4分科会の講師にお願いした。

### (3) 広報のポイント

青少年の体験活動に直接的、間接的に携わっている団体や個人にチラシが渡るよう配布して広報した。学校関係では、小学校・中学校の全教職員一人ひとりにチラシが渡るよう、島根県の小中学校全校に教職員の人数分配布した。特に島根県の初任者には、島根県教育委員会に初任者研修の単位になるように位置づけをしてもらい、初任者研修時に呼びかけをしてもらった。また、島根県、岡山県、山口県の学校長期自然体験活動指導者及び法人ボランティアにもチラシを配り広報した。




第2分科会 古瀬先生

地域の子どもに対して活動を行っている団体（公民館や交流センター、NPO法人、子育て支援施設等）にもチラシを配り、広報した。

他には、2日目の分科会に関係のある団体（島根県ネイチャーゲーム協会、島根県レクリエーション協会、プロジェクトワイルド研修会参加者、島根インタープリター、PA研修参加者等）にチラシを配って広報するとともに、派遣社会教育主事研修や石見地区社会教育研修会等では、会議の中で時間をいただき直接広報した。

そして、将来の青少年体験活動を担う大学生にも広報した。具体的には、三瓶にボランティアに来た学生には直接広報するとともに、本事業を島根大学教育学部生必修の「1000時間体験学修」プログラムの中の基礎体験領域の活動に位置づけてもらい、教育学部の学生や体験活動に興味を持っている学生に広報した。

#### (4) 日程表

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
12月4日						受付	開 会 式	基 調 講 演	講 話	事 例 発 表	情 報 交 換 会	入浴		就 寝 準 備	就 寝		
						昼食						自 由 交 換 会					
12月5日	起 床 荷 物 の 整 理	朝 食	分 科 会 Ⅰ		昼 食	分 科 会 Ⅱ											

※分科会Ⅰでは、第1分科会・第2分科会・第3分科会を開催  
分科会Ⅱでは、第2分科会・第3分科会・第4分科会を開催した。

第4分科会のひとコマ

#### (5) 運営のポイント

実行委員会では、主催である国立三瓶青少年交流の家に事務局を設置することで、準備・運営等スムーズに行うことができた。また、実行委員は前日から国立三瓶青少年交流の家に入所し、事前に会場確認や打合せを行うことで、余裕をもって臨むことができた。当日は事例研究での事例発表を行うとともに、分科会の運営を担当し、それぞれの分科会を準備・運営することができた。なお、今回はまとまったの閉会宣言はせず、午後の分科会終了を全体会終了としたため、各分科会で全体の閉会宣言を行い、次年度開催への案内を併せて行った。

#### (6) 安全管理のポイント

参加者には事前に、施設の状況・生活について・研修の詳細等について情報を提供することで、安心して研修に参加できるよう配慮した。また、体を動かすことの多い分科会では、講師に事前に会場を確認していただき、安全に活動できるように配慮した。分科会の中では、講師から参加者自身が活動するうえで安全に活動するためのポイントや、参加者がファシリテーターとして子ども等に活動を促す場合の安全管理の観点を指導していただいた。



第3分科会でのひとコマ

#### (7) アンケートの主な記述

- ・ 子どもたちにとって、体験の学びの大切さを再確認できました。
- ・ 講師が充実しているのがすごい。
- ・ 様々な立場の方が参加されていますが、内容がわかりやすく、聴きやすく、多くのことを学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・ せっかくの協議の時間が短くて、話を聞きっぱなしになってしまったようで残念です。
- ・ 様々な職業、年齢層での交流ができ、うれしかったです。学びの多い2日間でした。ありがとうございました。
- ・ 初日がもう少し余裕がほしいところ。1つ1つのこまが短く、もったいないような気がした。

### 10 成果と今後の課題

#### <成果>

このフォーラムの参加者に対するアンケート結果によると、満足度は「満足」と「やや満足」を合

わせて 96.1%と高い評価を得た。このことは、このフォーラムが「体験活動の有用性」についての有効な発信の場になった事業といえる。

本事業には、青少年施設から 31 名、一般から 72 名、合計 103 名の応募があった。キャンセルがあり最終的には 96 名の参加となったが、多くの体験活動実践者等の参加が得られた事業となった。参加者の内訳は、教職員が 19 名、社会教育主事が 14 名、島根県内外の教育行政関係者 2 名の参加があり、普段から青少年の教育に携わる関係者の参加が得られた。また、大学生も、「自分のスキルアップを目指したい」「普段のボランティアとは違う活動をしてみたい」「さまざまな人と交流して、コミュニケーション能力を高めたい」と自己啓発を求めて 17 名の参加が得られた。この他にも、地域ボランティアや森林インストラクター等の参加があった。このように様々な業種で青少年の体験活動の関係者が一堂に会し、実践的な研究協議や実践活動を通して相互の交流を深めることができたことは大きな成果となった。

講演・講話・分科会の内容においては、体験活動に造詣の深い講師陣により具体的な事例を織り交ぜての興味深い話から体験活動の意義の再確認やその有用性を普及させる有効な機会となった。その中でも、新富先生の「ヘッド(頭)・ハート(心)・ハンド(手)すべてで体験活動を行うこと。『頭』で知る教育と『心』で感じる教育を大切にし、『手=技術』を持って主体的に活動することで人間力が高まる」という内容の講演と、児島先生の「長期集団宿泊活動中のけんかや争いごとは人間関係を深めるチャンスと捉えること。自分たちで解決し乗り越えることで新しい友情が生まれる」という内容の講話は、参加者が体験活動の推進に向けて共通認識を持つことができる内容で大きな成果となった。このことはアンケートの中で、「講師のお話がとてもよかった。体験活動を意欲的に進めていきます。」という感想に繋がり、今後体験活動が推進されることへの期待がもてるフォーラムになった。

分科会の活動時間は 2 時間 30 分の設定で行った。それぞれの内容を深めるには十分な時間ではなかったが、この分科会を通して自然体験活動や人間関係づくりの手法について学ぶきっかけ作りの良い機会とすることができた。このことは参加者のアンケートの中で「分科会を 2 つ選ぶのが心苦しかった。すべて受けたかった」「分科会の講師が良かった」「講師の先生を定期的に三瓶に呼んでほしい」等の声が寄せられ、参加者のフォーラムに対する満足度の高さに繋げることができた。

参加者には、今回の分科会の体験を通して興味を持った実践活動について、さらに各自で研修を重ねてもらい、体験活動の有用性についてより広く普及されていくことを期待したい。

#### <課題>

この事業を企画するにあたり、講演や事例発表後の質疑応答の時間を十分に設定することが難しかったので、1 日目の全体会の中で意見交換が十分できなかった方は、夜の情報交換会で意見交換をしてもらうよう計画した。全体会を運営する中でも情報交換会を活用していただくよう呼びかけをしたが、参加者からのアンケートには「1 日目は聞くことが多く、もっと意見交換があるといい」という記述があった。こうした要望に応じていくためには、全体会の開始時間を午後から午前へ繰り上げたり、事例発表の数を減らしたりする等、フォーラムの全体構成について見直す必要がある。



第 1 分科会の研究協議

次に、第 1 分科会の参加者からは、アンケートの中に「長期集団宿泊活動を推進するための話し合いにまで深まらなかった」というような意見があった。これは、参加者のバックボーンに 2 つの点で大きな差があったことが原因として考えられる。1 つ目は、参加者の中には長期集団宿泊活動をすでに積極的に実施している方がいる一方で、その活動をほとんど知ら

ない方もいて、長期集団宿泊活動に対する経験量に差があった。2つ目は、2日目の分科会から参加の方もいたので、初日の講演や講話の内容（上記成果に記載した内容や宿泊日数は児童の本音が出てくる3泊4日以上が望ましい、等）が分科会の参加者全員の共通認識とはなっていなかった。これら2つのことを改善するためには、参加申し込みの段階で参加者自身の体験活動への取り組みや日ごろ感じている疑問点等を事前調査しておき、参加者のバックボーンの差を考慮した進行や運営に活かす必要がある。さらに、できる限り全日程の参加を呼びかけ参加者のバックボーンの差をなくす必要がある。

### 1 1 普及計画・普及実績

成果についてはHP上に掲載するとともに、関係機関等に紹介していく。また、今回の内容に関係する事業を企画した時には参加者に案内し、ブラッシュアップする機会を提供する。

### 1 2 その他

当日は12月にはめずらしく晴天で暖かく、野外で行う自然体験活動もあまり寒さを感じることなく実施することができたのはとてもありがたかった。

また、大学生にとってはたくさんの社会人と触れ合う良い機会であった。「いろいろな人とコミュニケーションをとる」という目標をもって参加している大学生もおり、社会人との会話を通して学びを深めた大学生もたくさんいてうれしく思った。

今回の事業では、講師陣が充実していたことが参加者にとってとても魅力であったと思う。地域に様々な情報提供及び啓発活動をしていくのも国立青少年施設の大切な役割である。こういった事業を通して、これからも国立施設としての役割を果たしていきたい。

(担当 竹下修二)



第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会